教職研究　第 13 号（2022）　pp.82-92

授 業 記 録

「つくる」と向き合う

荒井　英治郎（信州大学学術研究院総合人間科学系）

１．はじめに

本稿は、2021 年度に開講した教職科目（選択）「現代社会と教育問題」（2021 年 11 月 30 日）の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー（岩瀬直樹氏：軽井沢風越学園校長・園長）の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である小田悠太さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

２．ゲストティーチャーの話

（１）自己紹介

【ゲスト】皆さんこんにちは。軽井沢風越学園の岩瀬と申します。私は埼玉県で小学校の教員を 22 年やってきました。その後東京学芸大学教職大学院の教員養成課程で 3 年間教師教育に関わってきました。「向き合う」というテーマは自分に親和性のあるテーマだと思っていて、公立の務めが長かったのですけど、公教育の中で学校が変わるとはどういうことだろうとか、幸せな子ども時代とはどういうことだろうとか、生徒と向き合いながら試行錯誤してきました。

（２）向き合う

【ゲスト】私自身が学校教育とどのように向き合ってきたのか、そして、今どのように向き合っているのか、それからどう向き合っていきたいと思っているのかを話題提供できたらと思っています。皆さんは子ども時代はどんな子どもでしたか。学校とか保育園、幼稚園は好きでしたか。学校の先生や先生を志す人はやはり学校好きだった人が結構多いかもしれません。私の子ども時代は、北海道札幌市で生まれて、札幌で過ごしました。私自身は何も困っていなかったのですが、母親はすごい私の子育てに悩んだようで、よく泣きながらおばあちゃんに電話をして「もう直樹を育てるのは無理かもしれない」というくらい動き回る子だったみたいです。当時の通知表には、「直樹君は　元気があって勉強もよくわかるし、とてもいい子だと思っています。でも少し自分勝手、わがままなところがな

いかなあ。反省してみてね。友達は誰にでも親切に、言いたいこと、したいことあっても時には我慢して譲ってあげること。二学期も頑張ろうね。」と書かれています。なかなか激しい所見ですよね。こんなまっすぐな所見は今ではなかなか書かないですよね。それぐらい動き回る子どもでした。でも私の多動傾向なところは必ずしも「弱み」にはなっていないと思っていて、むしろ大人になってからは「強み」になっているなと思うこともあります。例えば、思ったらぐっとやってみること、やってみてから考えることなどは明らかに強みになっていて、子ども時代に気になっていることは必ずしも短所とはいえないなと思ったりもします。

私が教員をやりながら持ち続けている問いは「学校って何のためにあるんだろう」、「そもそも教育って何なんだろう」ということがあります。30 年近く考え続けています。風越学園をつくろうと思ったきっかけの一つは公教育が変わっていく触媒になりたいと思ったのです。自分の学級単位、あるいは学年単位で何かチャレンジするのは 22 年やってきて、その可能性は実感していました。その手応えを足がかりにもっと学校教育や学校は変わる可能性がたくさんあると思っています。そんなことを考えるきっかけになる場をつくりたいと思ったのが大きい要因です。私自身公教育が変化していくことにずっと向き合ってきましたし、今もまだ向き合い続けている最中です。

風越学園でチャレンジしていることはたくさんありますが、うまくいっていることが 1 あったら、うまくいってないことが 10 あるような日々です。でもその中で学校はどうあればいいのか、教育はどうあればいいのかを一緒に考えている日々です。

（３）軽井沢風越学園の特徴

【ゲスト】軽井沢風越学園は、日本で唯一の私立義務教育学校です。私たちは「幼小中混在」という言い方をしていますが、幼稚園児から 8 年生までが混ざり合いながら学んだり暮らしたりしています。今はまだ 9 年生はいません。

環境の特徴としては、オープンな空間です。どこにいてもあちこちの学びがよく見えるのでお互いの授業に刺激を受けたり、気になるなと思ったら見に行ったり自由にできます。また、ライブラリーが真ん中にあることが特徴です。学校の「心臓」と言っていますが、今 3 万冊の蔵書があって、子どもがこんなことを調べてみたい、探究したいと思うと、すぐ手を伸ばせるところに本物があるということを大事にしています。もう一つは、「ラボ」コーナーがあって、何か作ってみたい、試してみたいときにはすぐに手を伸ばして作れる環境を大切にしています。この他、大きな森があって、そこで遊んだり、暮らしたりできるようになっています。3 年生以上は今 Chromebook を持っていて、文房具のように持ち歩いて使っています。

子どもは必要に応じて動いていくので常に流動している感じ、空間で子どもの動きを制御するよりも、その空間を子どもたちが自分で選び、使っていくような校舎です。

教室の中では異年齢が教えあったり学

びあったりしながら自分のペースで学びをしています。個々の教室から出てはいけないという学びではなく、学びに応じて子どもが場所を選んでいくのです。

カリキュラムの特徴として風越が一番大事にしていることは、「つくる」ということです。軽井沢風越学園は、子どもも大人も「つくる」経験を、じっくり、ゆったり、たっぷり、まざって積み重ねていきます。本気で手間をかけて「つくる」ことに没頭し、ときには不安や不安定さを味わいながら「つくる」ことに挑戦していきます。私たちは子どもこそがつくり手であることを信じています。ここでいう「つくる」は、物理的なものや学習の成果物だけにとどまりません。安全・安心な場を自分たちでつくる、学びをつくる、自分たちの学校をつくる、コミュニティをつくる、仕組みをつくる、ルールをつくる、自分をつくる。つまり、「わたし（たち）の未来をわたし（たち）でつくる」冒険をするのです。子どもたち、スタッフ、保護者、地域の方々など、軽井沢風越学園ではだれもがつくり手です。「つくる」ことを通じて、「自由に生きる」ということと「自由を相互に承認する」ということを繰り返し試していきます。そうすることで、一人ひとりが幸せになり、幸せな社会をつくっていくのです。

何か実践するとき、迷ったときは常にここに戻るようにしています。本当に子どもが作り手になっているだろうか、子どもこそが学びのコントローラーを持っているだろうか、学校教育で大事にすることはこれに尽きるのではないかと思っています。たっぷり「つくる」経験した人は大人になっても社会のつくり手になりたいと実感を伴って思えるのではないかと思うので、この「つくる」ということは色々な人と共有したい考えだと思っています。

より具体的なカリキュラムの特徴を説明します。1 つ目は、異年齢であること、3 歳から 15 歳が混ざっている環境であること、です。例えば、算数だったら 3 年生から 8 年生がいる、自由進度で混ざって学んだりしています。そんな風に異年齢であることの価値を探究していることがカリキュラムの大きい柱です。

2 つ目は「セルフビルド」といって、自分がこれを学んでみたい、探究してみたいことを自分でやってみることができることと、遊びと学びのコントローラーを自分で持つということが大きい特徴です。

3 つ目は、幼小の連続性です。幼稚園から小学校に入り急に環境が変わるではなく、幼小がスムーズにつながっているカリキュラムを構想しています。1、2 年生は午前中はたっぷり外で遊んだり、プロジェクトをやったりしています。

4 つ目は、探究の支えになるような国語・算数・理科・社会等、探究の支えになるようじっくり学んでいこうとして土台の学びとして置いています。

5 つ目は一番大きい特徴ですが、探究の学びです。教科融合のプロジェクトをカリキュラムの真ん中に置いています。理想的には総時間数の半分くらいはプロジェクトにしたいと考えてカリキュラムを作っています。

異年齢に関しては、「ホーム」と呼ばれている生活の単位があって、後期では 3 年生から 8 年生が混ざった異年齢集団で朝と帰りにミーティングをしています。異年

齢は本当におもしろくて、さっきも算数の様子を見ていましたが、中 2 の子がわからないところを中 1 の子に質問してといったように、年齢とかを全然関係なく子どもたちが学び合うことが起きてきています。そう思うと、これまで年齢で分けてきたことはいったい何だったのだろうと、子どもの様子から考えさせられます。中 2 の子が素直に中 1 の子に聞きに行けることは素敵なことだと思っています。わからないことだから聞けばいい、年上だからわかっていなくてはならないという、比較から自由になっているということです。あと、幼小の段差はよく問題になりますが、これも大人側の制度の問題だと思います。幼小が一緒になると何が起きるのか、今まさに試行錯誤しています。一緒に暮らしたり学んだりすることの中から何かこれからの教育を考える新しいヒントがあるのではないかと思っています。ただ、思い描いていることがすぐうまくいくかは別であって、スタッフも学びが充実するにはどうしたらいいか、日々向き合いながら悩んでいるという感じです。

幼小中混ざっていると面白いと思うのは「アウトプットデー」というプロジェクトの発表の日でのエピソードです。ある男の子が毎回大道芸を発表します。それを幼児が見に来て上級生が抱っこしている。これが日常です。抱っこしている一人は 8 年生の子で、保育や福祉に関心があるので将来そういう方向に進みたいと言っているのですが、こういうことを日常的に感じられることは大きいなと思っています。

また、7、8 年生が「生命」というテーマでプロジェクトをやりました。ある 8 年生の子が「生命と心理学」というテーマ設定をして、どうして人は恋愛の感情が生まれるのか、生命といえば恋愛でしょうということで心理学を学びました。ただ、発表を見に来たのが幼児だったので、なんとか伝えようと一生懸命「人を好きになったことあるでしょ？」と丁寧に関わっていました。また、ある子は、生命といえば水だから、井戸を掘ろうということになり、井戸を掘ったら焦げた木が出てきて、いったいこの焦げた木はなんだと調べたらどうやら江戸時代に浅間山が噴火したときのものだということがわかったり。他には、「生命と時間」というテーマで、8 年生がハイデガーを読んで、人は時間をどのように経験しているのかについて発表しました。自分が気になること、いてもたってもいられないってことをやってみることもプロジェクトだなと思っています。このように、一人一人が自分の探究したいことをずっと調べて探究していくことをカリキュラムの真ん中に置いています。自分が探究したいと思うこと、関心があることをとことんやってみるという経験が学校教育ではすごく大事になってくるのではないかと思っていますが、探究できる子もいればなかなか自分の探究テーマが見つからずに苦しんでいる子もいて、思い描いていることを実践することは本当に簡単ではないなと日々感じています。

このように日々試行錯誤していることを紹介すると、「これって風越だからできるんですよね」とか「その環境だからできるんですよね」といったようにどこか遠くのことのように言われることが多いです。私としてはそう考えていないのですが、ど

うしてそういう距離感ができちゃうのかを考えたりもします。

今までの話をお聞きになって、どのようなことを考えたかを聞かせていただけると嬉しいです。

【参加者】事前資料や動画を見て、私の最初のイメージよりもテキストを開いて勉強している生徒さんがたくさん見られました。こんなに自由な学校に自分が通ったら絶対勉強とかしないで遊んでいると思います。なぜ主体的に勉強しようと思えるのか、スタッフが意識していることがつながっているのか、すごく不思議に思いました。

【参加者】私も同じように思いました。自由すぎるとある程度の強制がないと子どもはやり始めないというか、学びの楽しさはやっていく中で気づくことも多いと思うので、だらけちゃうのではないかと思いました。

【参加者】私は強制されることが嫌で反発していましたので、こういう自由な広場の方が自分から学ぼうとする意識が勝手に芽生えてきそうな気がしました。

【ゲスト】答えは持っていませんが、でも基本的に学ぶということは強制から生まれるのだろうかということは考えたいですね。今、風越で一番面白い現象が 3 年生以上の子です。彼らは公立の学校を 1 年は経験しているのです。その中には学びから逃走していく子が一定数います。1、2 年生は「風越ネイティブ」な子たちです。風越しか知らない子は、午前中外でたっぷり遊んだり、外でプロジェクトをやったりしますが、午後になると、校舎に入ってきて国語や算数に取り組むのですが、没頭して学ぶのです。「作家の時間」という自分の書きたいことを書く作文の時間では、45 分とか 90 分全く集中が切れないのです。

私たちは、1 年生や 2 年生はちゃんと授業規律をし、教えないと子どもは学ばないと思いがちですが、そんなことをしなくても、とても楽しそうに学んでいるのです。本を読めるようになるのも嬉しいし、書きたいことを書けるのも嬉しいし、算数をやっていくと日々遊んでいることと算数が「うわ、繋がった！」っていうのがすごく嬉しかったりして、集中している感じとはいったい何なのだろうと思いますね。私たちが強制してまんべんなく将来困らないようにやらなきゃいけないって思っていたことは何なのか、子どもの姿から考えることはたくさんあります。

【参加者】小中のつながりに関して、幼稚園の担当者と小学校の担当者が議論し合える、目線を共有し合えることは素晴らしいと思います。普通は小学校は小学校、中学校は中学校という形で段差を作っているのかなと思いましたが、いかがですか。

【ゲスト】まさに段差をつくると思います。中学校はこういうもの、小学校はこういうもの、幼稚園・保育園はこういうものというそれぞれの文化・価値観・信念があります。それを問い直すのは難しいですよね。なぜならその中では当たり前だからです。でも幼小中混ざっていると、当たり前じゃ

ない人が隣にいることになります。そんな価値観からくるんだみたいなことは、日々の中にあるので、今までの自分の当たり前の中にいられなくなる。ほんとにこれって正しかったのかと問い直されることが多いです。自分の前提を問い直す経験がどれだけできるかが私たちが成長できるかどうかを握る大きいカギだと思います。

【参加者】子どもとスタッフの関係が互いにいい影響を生み出しているのかなと感じました。図工や工作の時に小さい子に色々な道具を使わせたら怪我のリスクとかを考えてしまいますが、いかがですか。

【ゲスト】小さな怪我はいっぱいします。外もそうだし中もそうだし。ただ大事だと思っています。経験していくことで怪我のリスクを減らす、危なさを知っていくという経験です。「リスク」と「ハザード」は違います。小さなリスクは子ども時代にたくさん向き合った方がいいと思います。風越では、危ない道具の利用に関しては、「匠」制度」があって、「匠」の称号を得ないと自由に使えないのです。そうでない道具はどんどん使ってみる、トンカチ叩くくらいは痛いぐらいで済む。小さい頃だとそんなに力もないから。そういう経験はたくさんした方がよいのです。大事にしていることは、先にリスクを取ってしまわないことです。失敗できる経験をちゃんと保証することは幼児期でも小学校でもとても大切だと思っています。

（４）これからの公教育

【ゲスト】風越はどうしても特殊に見えるかもしれませんが、公教育の中でもできることはまだたくさんあるのではないかと思います。私自身は自分が公立で経験してきたこと、実践してきたこと、今やっていることは地続きです。ここでやっていることは公立でも実現可能だなと思っています。

私は公立の中で枠組みだったり、制度の枠の端っこを突っつくことを楽しんで実践してきました。「常識」に向き合えば、学校はもっと面白くなると思ってやっています。ポイントは3つあります。1つは、学習者を教室環境のオーナーにしていくということです。学ぶ環境は子どもと一緒に作れるはずだと思います。私の仲の良い友人はいわゆる教室の並びのことを「後頭部凝視型環境」と呼んでいます。前の人の後頭部を眺めながら勉強するというものです。ただこの環境は変えられるのではないかと思って、「教室リフォームプロジェクト」をやっていました。教室を自分たちで生活しやすいようにリフォームしましょうというプロジェクトです。自分たちが動くことで環境は変わるという経験ができます。自分の手元から環境や学びが変えられる、物理的に変わっていくという経験はとても大きいと思っています。正解はなくてどうやったら学びやすい、生活しやすいかを考えて何回もリフォームすると、どんどん学びの環境が自分たちのものになっていきます。

学びについても先ほど強制しないとできないのではないかという論点がありましたが、私は公立で「自分で学習計画を立てて、一人ひとりが違うことをやっている

時間」を実践していました。学習者は強制されないと学ばないのかということについてのチャレンジです。自分で学習計画を立てて、自分で学んでみる。人は自分で自己選択・自己決定したい欲求があると思っていて、テストに関しても自分のタイミングで理解できたと思ったら受けてみる、受けてみて理解できていたら次に進む、間違っていたらまだ理解できてないのだなと思って学び直す、ということを試していました。一斉に同じペースで進めなければ人は学ばないということは私たちの思い込みであって、そうではない学び方もたくさんあるのではないかと考えて実践しています。

また、やってみたい、実現したい、解決したいということにチャレンジしてみたら本当に実現したという経験を子ども時代にどれだけ積み重ねられるか、このことは公立私立関係なくたっぷりしてほしい原体験だと思っています。そしてこういうことは実は環境に関わらず本当はどこでもできることなのではないかなと思っています。

私はこれからの社会を創っていく子どもたちにとって、教室は「25 年後の社会」だなと思っています。学校や教室のありようが 25 年後こんな社会になったらいいなというありようになっているかどうかで、教室や学校を眺めてみたいと思っています。今の教室や学校の様子が息苦しい残念な様子だったら 25 年後の社会もそうなっているかもしれない、25 年後こうなっていたら素敵だなということから逆算して、教室や学校もそういう環境にしたいなという観点から学校を構想したらどうだろうと考えるのですね。私はやっぱり社会のつくり手がたくさんいる社会がいいなと思っています。とすると、子ども時代にたくさんつくる経験をしてほしいなと思います。

【参加者】公立学校の小学校段階ですら気持ちや熱意を持てばそこまで到達できるんだということを知りました。子どもたちだけじゃ絶対できないという思い込みに対して、大人たちが背中を押してあげることが必要ではないかと思いました。特に、子どもたちが成功体験を積み重ねていくことで、笑顔や主体性があふれる 25 年後の社会をつくるというのは、共感しました。自分が将来寄与できることがあれば子どもたちが自分たちから自分の思う世界や社会を描くことを実現するための姿勢を身に着けていってもらえたらと感じました。

【参加者】お互いの異なる価値観を異年齢で学ぶのであって、自然と一緒に学ぶことによってお互いを認め合う雰囲気があるように感じました。いじめなどに関しては異年齢の場合抑制されるものなのでしょうか。

【ゲスト】コロナが 8 月末からデルタ株が広がって、風越では 8 月後半から 10 月中旬まで学年ごとに分かれて生活する時間が 1 か月ぐらい続きました。普段混ざっている風越の子どもたちにとって異年齢で混ざらずに近しい年齢だけで過ごす初めての経験でした。2 か月過ごして私に見えたことは、近しい年齢の方が揉めごとやい

じめが起きやすい。なぜかというと、「比較」が生じるのですね。遅い、早い、できる、できないみたいなことが。異年齢になると「比較」から自由になるというのと、年齢差がすごく離れてくるので嗜める人が出てきます。もちろんこのことは学校が持っている文化などにもよるかと思いますので、異年齢で混ぜればそうはならないとは一概には言えないと思います。

（５）質疑応答

【参加者】教室は「25 年後の社会」というのがとても印象に残りました。いじめが起きない理由として、私はみんながそれぞれ自分のやりたいことをやることができるからではないかと思いました。学校生活が楽しくないと誰かを標的としていじめをする可能性が出てくると思うので、みんながやりたいことに取り組めているという点がポイントではないかと思いました。

【参加者】風越学園では互いに教え合ったり学び合うことが、日常的に、かつ無意識的にやっているのではないかと感じました。道具の使い方の「匠」制度も簡単なものはみんな自由に使えるけど危ないものは匠にならなければいけない、そのあと匠を取った人だけが他の人に教えられるという話を聞いて、教え合うことに違和感や躊躇いがないのだなと感じました。

【参加者】学び合いや教え合いをどのようにつくっていくのかは、言葉で言うのは簡単ですが、文化として成立させていくことはとてもハードルが高いことだと感じました。

【ゲスト】人は学び合う力を持っているというのが基本的な前提です。1、2 年生の様子を見ていると、日々一緒に遊んでいたり、日々けんかしたのを一緒に解決していくということが彼らの中で意識として分かれていません。けんかをしているのと捉えるのと同じように、わからないという人には教える、わかったらできたと声をかけるとか、全てが同一線上にあると思うから、彼らは今いる中学生とは全然違う次元で学び合うことを経験していると感じています。年齢が上がっている子たちは経験し直すことが必要で、7、8 年生は一対一のペアでコミュニケーションをするといったことをやり直したのですね。一対一で何分か話す、では次は 4 人で話してみようとか、関わってみることの良さとか、一緒にやってみることの良さとか、経験のし直しを年齢が高ければ高いほど時間をかけてやっている感じはします。もしかしたら今の学校教育の中で抜けているのは、「協働することの良さ」みたいな原体験の不足ではないかなとも思います。学校教育は、ずっと遊びとは一線を画してきたのですね。「遊ぶ」ということは学校の領域ではない、学校外の領域で経験することが遊びとして位置付けられてきたかと思いますが、今の子どもの経験の総時間に対して学校の占める割合はとても大きいということと、放課後の時間をほぼ全ての子どもが喪失しているという現状を踏まえると、もう一度遊ぶ、共同で遊ぶ、群れで遊ぶ、自由に遊ぶということの中に埋め込まれている経験を学校教育はもう一回考え直さない

といけないのではないかと思います。

【参加者】紹介された実践の中での主体的な子どもの学びというのが、私たちがイメージしてきた学習の常識とかけ離れていて、自分が同じ立場だったらできそうにないし、子どもの可能性を私は下に見ていたかもしれません。主体的な学びということがどれだけ大切なものか、どれだけ意味があるものなのかを強く感じることができました。

【参加者】スタッフの皆さんは子どもたちの学びに対してどのように関わっていらっしゃるのでしょうか。また、風越学園の場合、「宿題」についてはどのような扱いになっているのでしょうか。さらには、保護者との関係はいかがでしょうか。

【ゲスト】宿題に関しては、ほとんどないのではないかと思います。ただ国語のスタッフは結構出しているかもしれません。また保護者にこれ（宿題）をお願いします、ということも特にやっていないと思います。保護者との関係で言えば、私たちは一緒に学校をつくりたいと思っている、学校では保護者と一緒に作るとはあんまり言われないかと思いますが、子どもと保護者とスタッフで学校をつくるとはどういうことかを冒険したいなとも思っています。感染症の関係で、なかなかまだ一緒につくるという領域にたどり着けていませんが、例えば「放課後村」というのがスタートしていて、学校の SOS に応えて、保護者主体で豊かな放課後を作ろうという動きが出てきたりしています。

【参加者】教員養成や教師の育ちや学びに関して、どのような思いを持たれていますか。学校組織には一定の同調圧力というものがあって改革がなかなか進まないこともあるかと思いますが、岩瀬さんはこれまでそのようなものにどのように向き合ってこられましたか。

【ゲスト】若手の頃、特に初任から 10 年くらいは「戦う」という選択肢を取っていました。「自分一人で勝手にやる」という選択肢ですね。職員旅行で先輩と大喧嘩して俺はもう二度と職員旅行には行かないみたいな。そういう感じの嫌な教員だったので、「俺一人でやるぜ」みたいな感じを 10 年近くやりました。ただそれで限界を感じたのです。やっぱりそれは「単年」のことでしかないということです。一番大きい出来事は、私が担任していた子たちが次の年に荒れるという経験をしたのです。当時、私はカリスマ教師を目指していたので、面白いネタをバンバン振って引き付ける先生を目指していました。そうしたら、岩瀬の授業は面白かったのに、次の先生はとてもつまらないとクラスが荒れたのです。私は最高のクラスだと思っていたメンバーが、同じメンバーでめちゃくちゃに荒れたのです。いじめも起きて、口を開けて餌を待っている子どもたちを育ててしまったのだという痛恨の出来事がありました。自分ひとりでやっていると見えなくなっていくことの怖さとか一人でやっていくことに限界を感じました。毎年くじ引きで次の年度が決まる環境では本当に子どもたちは幸せになれないなと痛烈に感じて、

学校全体でやるしかないと腹を決めたのです。そこから研究主任をやりたいと手を挙げて学校でアプローチするとはどういうことか、30 代から 40 くらいまで 10 年間チャレンジしました。その結果、この学校でも変わっていけるとか、全然気が合わないと思っていた先生、自分が一番遠いと感じていた先生たちとも手をつなげるところがあるなという経験をすることができました。自分一人でやったらもっと実践的には行けたかもしれないけど、でもみんなでやったからこそ、年度が変わっても続いていく足腰の強い学校を作ることができたという感覚はあって、その時に公立学校も変われるのだと確信を得ました。ただ校長が変わると全部変わって振り出しに戻るということもあって、ずっと変わり続けられるような職場で働いてみたいとは思いました。変わり続けることができる、自分自身も変わり続けられる、学び続けることができるのだという場を作ったらそこを拠点にして、色々な人とやり取りできるのではないかという思いが強くなって、今に至るという感じです。本当に若い頃はひどかったですね。私が研究主任になったとか学校をつくったというと、当時同僚だった先生たちは心底驚きますからね。「人と一緒にやれるんだ」と。私自身も変化したのだなと思います。

【参加者】そのような経験を、今の風越学園ではどのように他のスタッフに伝えているのですか。

【ゲスト】そういう意味では、風越は特殊な環境ですね。実践もよりよくしようという動きが常に生まれています。むしろ邪魔しないようにするということが一番大事な関わりになっています。また、私は他の公立学校に関わることもあるのですが、その職員集団をあきらめないこと、この集団は絶対変わるという高い期待をもって関わるということをとても大事にしています。そうすると確かに変わるのです。大人だってやっぱり成長したいし、確かに自分が変わった実感があると、よりやりたいと変わっていくから、個のスタンスは本当に大切だなと思っています。

ただ、風越に代表される学習者中心の学びを私たちは子ども時代に自分で経験していないのですね。一万数千時間の被教育体験は結構強烈で、授業とはこういうもの、先生とはこういうもの、学校とはこういうものということが身体中に染みついているのです。何かうまくいかなくなるとそこに戻りたくなって、もどるとちょっとホッとするみたいな。やっぱりこうだよなって。それをやっている限りは誰からも批判されないのですよね。

ただ学習者中心の学びはちょっとうまくいかなくなると、とても批判されます。ただそういう授業ができるようになるため力量をどうつけていけばいいのかは教員養成では教えてくれないし、学び方も体系化されてないから、それぞれがそれぞれなりにやってみるしかない状態です。そして、なかなかうまくいかなくて、そこから人が撤退していくというのが今の日本の状況だと思っています。そういう意味では、学習者中心の学びをつくっていく教員をどう養成するのか、どういう力量形成の道筋があるのかを明らかにしていくことが

これからの大切な役割で、もっともっと共有されて鍛えられていくべきだと思っています。

学校はこれからどんどん変わっていくと思います。私が若いころ今日紹介したことを実践しているとき、ただの変人扱いでしたからね。でも今はずいぶん変わってきています。学校はこう変わっていくといった確信を持っている人たちが増えているので、若い人たちがほんとに今までの自分の経験や今までの学校に捉われずに大胆なチャレンジをしていくと、必ず学校は変わっていく、そのことは社会が変わっていくということとイコールなので、大胆に実践し続けてほしいなと思っています。私たちはそういう人たちがのびのび実践できる環境をできるだけ頑張って作っていきたいと思うので、小さくまとまらないでほしいと思います。私たちは知らないこと、経験してないことがまだまだ山のようにあるので、学生時代に山のように経験して、山のように悩んで、前提を壊して、楽しい大人になってほしいなと思います。ありがとうございました。